

第 2 講

- ② オスマン帝国の支配体制は「柔らかい専制」とも形容される。スルタンによる専制が行われる一方で、帝国内外において「寛容」な姿勢がとられることもあり、このことが帝国内の多様な宗教・民族の共存を支え、良好な対外関係を構築することにも貢献した。しかし、この前近代的な「寛容」は周辺諸国に対する軍事的優位を前提としており、ひとたび軍事的優位が失われると、その「寛容」は、列強が帝国を政治的・経済的に蚕食する要因ともなった。タンジマート（恩恵改革）による近代国家形成の試みもその多くが頓挫し、列強間の同盟関係に巻き込まれる中で、列強間の大戦争へと巻き込まれていった。

上で示された文章の内容を踏まえて、15世紀から20世紀初頭にかけてのオスマン帝国の歴史を、帝国内外における「寛容」と対外関係の変化を中心として18行以内で述べなさい。下記の8つの語句を必ず一回は用いたうえで、その語句の部分に下線を付しなさい。

ヴァロワ家	バグダード鉄道	ミット	カピチュレーション
ウィーン	パン＝スラヴ主義	聖地管理権	カルロヴィッツ条約